

ヤコブ4章3節 「聞かれない祈り」

1A 妬みの問題

1B 奪い取る心

2B 求めない心

2A 快樂のための祈り

1B 礼拝なき祈り

2B へりくだりなき祈り

3A さらに豊かな恵み

1B 妬むほど愛された者

2B 願い以上に願いをかなえる方

3B 主のいつくしみ

4A へりくだり

本文

ヤコブの手紙 4 章を開いてください。4 章全体を午後礼拝で、一節ずつ見ていきますが、今朝は 3 節に注目します。「**求めても得られないのは、自分の快樂のために使おうと、悪い動機で求めるからです。**」

ヤコブは、祈りについて、神に必要を求めることについて積極的に教えています。「1:5 **あなたがたのうちに、知恵に欠けている人がいるなら、その人は、だれにでも惜しみなく、とがめることなく与えてくださる神に求めなさい。そうすれば与えられます。**」これは、まぎれもなく、イエス様が山上の説教などで何度となく教えられたことです。「**マタ 7:7-8 求めなさい。そうすればさらに与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれでも求める者は受け、探す者は見出し、たたく者には開かれます。**」

けれども、求めても得られないことがあるとヤコブは教えるわけです。それが、自分の快樂のために使おうと、悪い動機で求めるからだ、と言っています。そこで今朝は、求めても得られないこと、祈っても聞かれないということに注目したいと思います。祈りは聞かれると教えられているのに、それでも聞かれているように思われないことがあります。

1A 妬みの問題

その疑問の前に、まず、祈りのない世界について考えたいと思います。ヤコブが本文の手前、2 節でこう言っています。「**あなたがたは、欲しても自分のものにならないと、人殺しをします。熱望しても手に入れることができないと、争ったり戦ったりします。自分のものにならないのは、あなたが**

たが求めないからです。」

1B 奪い取る心

祈りのない世界は、妬みと争いで満ちます。なぜなら、欲しても自分のものにならない時に、祈り求めることがないので、自分で奪い取るしかないのです。自分は人間であり、神のように全能でなければ、主権者でもありません。ですから、自分の欲しているものをそのまま得られるわけではありません。そこで、与えることも、取り去ることもご自由にすることができる神に、願い求めるのが筋ですが、願い求めないので、自分で奪い取るしかないのです。これが、祈りのない世界、願い求めを神に献げることのない世界です。

カインがアベルを殺した時のことを思い出してください。彼は、自分の献げものを神に受け入れられませんでした。彼は、神に尋ね求めればよかったのです。しかし、彼は激しく怒り、顔を伏せたのです。神を仰ぎ見ることをしませんでした。そして、自分の手でアベルの命を奪い取ったのです。妬みや争いが起こっている時、そこには神への祈りが不在なのです。

2B 求めない心

求めることが必要です。祈り求めているうちに、主が自分の心さえ変えてくださいます。御霊によって、私たちが祈り求めている時に心が変わられ、神のみこころに沿っていくのです。御霊がその祈りを助けてくださり、みこころにそって執り成してくださっているからです。

しかし、なぜ求めようとしないのか？それは、主はとても良い方で、惜しみなくご自分のものを施してくださることを信じていない、あるいは退けているからです。ヤコブは、「1:17 すべての良い贈り物、またすべての完全な賜物は、上からのものであり、光を造られた父から下って来るのです。」と言いました。このことを信じていない、いや、信じようとしないので、求めません。

ユダの王アハズのことを思い出します。彼は、イスラエルとアラムの王がユダを攻める知らせを受けて、心がなえてしまいました。けれども、預言者イザヤが、そんなことは起こらないという、神のことばを伝えました。そして、「主を試しなさい」と勧められます。そんなに主を信じられないのであれば、主が活着していることを示すから、試してみなさいと勧められたのです。ところが、主を試すことはしません、と言って拒みました。

それでアハズが何を行ったのか？彼は祈り求めることをしなかったので、アッシリアにイスラエルとアラムを攻めるようお願いしました。それで何が起こったか？二つの国は滅びます。けれども、そのことでアッシリアがユダをも攻め始めたのです。さらなる争いが拡大しました。これが、求めないことの代償です。

2A 快樂のための祈り

しかし、聞かれない祈りというものがありますね。これが、多くの信仰者が気になる問いです。ヤコブは、自分の快樂のために使おうと、悪い動機で求めるからだ、と言っているのですが、先ほどのカインの例を挙げましょう。彼が、仮に主に「私のささげ物に目を留めてください。」と言ったら、その祈りは聞かれたと思いますか？いいえ、主がこうカインに語りかけておられるからです。「創4:7 もしあなたが良いことをしているのなら、受け入れられる。しかし、もし良いことをしていないのであれば、戸口で罪が待ち伏せている。罪はあなたを恋い慕うが、あなたはそれを治めなければならない。」

主が、カインが良い動機でささげ物をしているのではないことを、彼の心を見て知っておられました。カイン自身も知っていたのです。カインが、ささげる時に、悪い動機で献げていたのですから、それで受け入れられるはずがないのです。詩篇交読で、「66:18 もしも不義を 私が心のうちに見出すなら、主は聞き入れてくださらない。」と読みました。

1B 礼拝なき祈り

アベルのが受け入れられて、カインのが受け入れられないのは、アベルのが信仰によるであることが、ヘブル書に書かれています。それが良い行いで、カインのが悪い行いであったとヨハネ第一にはあります。アベルは、羊の初子の中から、肥えたものを献げました(創世 4:4)。彼は、主がいけにえによって、自分たちを受け入れてくださることを知っていました。そして、そのことを、自分にとって最上のものを献げることによって、示していました。

私たちが、イエス・キリストのいけにえをないがしろにせず、他の大事なことを横において受け入れるのであれば、それは良い行いであり、受け入れられるのです。この方が、神の独り子として、子羊のようにして、自分の罪のために血を流し、屠られたことを、真心から、それを人生の中で、生活の中で最も大事なこととして受け入れるのであれば、受け入れられるのです。

つまり、主を真実に礼拝している中で、その祈りは聞かれるのです。先ほど話しましたように、私たちの主は、気前の良いお方です。惜しみなく、天にある良きものを、その完全な賜物をくださるかたです。それは、あたかも恵み深い王が、その支配している民に贈り物を気前よく与えるようなものです。王であるキリストの前でひれ伏し、この方の主権を認めて、そのみこころのままに全てのことは行われることを認めます。その中でお願いするものは、王は気前よく施して下さいます。

願い求めは、礼拝の祈りに続いて行うものです。私たちの主が、祈りなさいと命じられたことを思い出しましょう。「マタ 6:9-11 天にいます私たちの父よ。御名が聖なるものとされますように。御国が来ますように。みこころが天で行われるように、地でも行われますように。私たちの日ごとの糧を、今日もお与えください。」御名を聖なるものとされますように、御国が来ますように、そしてみこころ

が天に行われるように、地にも行われるように、と祈った後で、日ごとの糧を今日も与えてください、という祈りが続きます。

ところが、祈り求めることが、王の前でもべが、その憐れみをこうということではなくて、まるで自分の願っていることをかなえる、お守りのように考える人々が多いです。ここで、祈りが聞かれるのか、聞かれないのかということを見ると、全く間違っしてしまいます。自分が欲していることが、ともかくも一番なのです。そして、神を利用して、うまくいかそうでないかを試すのです。神と人とがあべこべになるのです。神は王であり、私たちはその民です。私たちはしもべです。祈りを神が聞かれる時は、もっぱら主権者である王の憐れみと気前良さによるのです。それなのに、まるで自分が王のように、欲していることを神に伝え、神がしもべであるかのように仕える人なのだのみなして、祈る人々がいます。そうした祈りは、聞かれないのです。

2B へりくだりなき祈り

安直な願いを神に祈る人もいますが、実は、努力した人の祈りにも、神と人をあべこべにする過ちを犯します。宝くじに当たってほしいという祈りは聞かれないかもしれないが、自分が汗水流してこれまで一生懸命働いてきたのだから、それを主が受け入れず、神の国に入れさせてくれないなんて、もつての他！と怒るでしょうか？先ほどのカインの献げものの話に戻りますが、彼は大地を耕す者でした。そして、彼は大地の実りを主へのささげ物としました。それに目を留められなかったのです。しかし、その前に主は、大地は罪のゆえに呪われていると言われていました。それを聞いて、知っていたのにも関わらず、彼はささげたのです。

自分の義を立てて神の前に願うことは、神に忌み嫌われます。それは、王なる神の前のへりくだりに欠けるからです。自分が成し遂げたところで、王がすべての恵みを施しているからこそ、それを成し遂げることができたのであって、まずは、王の前でひれ伏し、感謝して、へりくだることが先です。しかし、その態度が足りない。イエス様が、神殿で祈るパリサイ人と、神殿の中に入らないで、胸を叩いて、罪人であることを告白する取税人の祈りと、どちらを聞かれたかという、取税人の祈りを聞かれたとい話からも明らかです。パリサイ人は、自分がいかに義の行いをしているかを述べているにしか過ぎなかったからです。取税人はへりくだりました。

ですから、「これだけのことをしたのに、あなたはこの願いを聞き入れるべきだ」という、自己憐憫のような祈りも、主の前では不遜でしかないのです。

3A さらに豊かな恵み

そこで、聞かれる祈りについて考えたいと思います。祈りが聞かれるのに、私たちが絶対に必要なのは、恵みです。ヤコブは6節で、「神は、さらに豊かな恵みを与えてくださる」と言っています。

求めないでいると、人が妬み、争うのだということを先ほど話しました。そこで全く欠けているのは、人を高く上げるのは神であって、神の恵みなのだということです。人が祝福されているのを、神からのものとして、共に喜び、祝福するのが、正しい態度です。しかし、自分はこれだけのことをしているのに、なぜ、彼だけがうまくいっているのかと思って、妬むのです。神がすべてを支配し、良いものは神が恵みによって与えられるということを知らないのです。

1B 妬むほど愛された者

そこで、自分自身が恵みを受ける必要があるのです。5 節で、ヤコブはこう言っています。「神は、私たちのうちに住ませた御霊を、ねたむほどに慕っておられる。」自分は他人を妬むのですが、ちょっと待て！あなたは、主に妬むほど愛されているのだよ、ということです。主が御霊をくださり、その御霊を神が愛されているというのは、御霊を通して私たちに、神の妬むほどの愛をくださっているということです。これほど、愛され、恵みを受けていることを知れば、他人を妬むことがどれだけ愚かかがわかりますし、妬みから離れようと願うのです。

妬むほど愛されているというのは、他に大勢の魅力ある人がいても、あなただけに目が留まっているということですね。雅歌において、ソロモンがシュネムの女に対して言っている言葉は、「2:2 わが愛する者が娘たちの間にいるのは、茨の中のゆりの花のようだ。」他の女たちを茨と形容しているのです！実際に、茨のようだと思っているのではなく、ただ、自分の愛する女だけを見たいので、他のものを退けている表現です。そうした愛をもって、主は愛しておられます。

そうした愛を受けたシュネムの女は、「2:3 私の愛する方が若者たちの間におられるのは、林の木々の中のりんごの木のように。」と答えているのですが、他の若者は林の木々にしか見えません。このように、神の恵みを知る者は、神のみを見る、神への愛が与えられるのです。

2B 願い以上に願いをかなえる方

ですから、主は私たちの祈りに、親しく答えてくださいます。それは、私たちが祈りに答えられるに値するからそうするのではなく、あくまでも、そうしたいから、愛しているから、願いをかなえたいと願われるのです。

そして、その妬むほどの愛は、時に私たちの思いをはるかに超えています。イザヤは預言して、「55:8 「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、あなたがたの道は、わたしの道と異なるからだ。」と言いましたが、私たちの思いをはるかに超えて、願いをかなえてくださることがあります。「エペ 3:20 どうか、私たちのうちに働く御力によって、私たちが願うところ、思うところのすべてをはるかに超えて行うことのできる方に、」ということです。

その、異なる道の中で大きいのは、「死といのちの原則」です。イエスが、死んで葬られたのに、

よみがえられたという、死ぬことによって、よみがえるという大いなる力を示すために、私たちを敢えて、自分たちにはできないという中で、ご自分の力を示されます。アブラハムが、イサクが生まれる時にも、自分も妻も、全く子を生めるような年ではなくなった時に、いのちを与えられました。ギデオンがミディアン人と戦う時に、戦う人数を一気に減らされて、300人になってから戦わせました。ヒゼキヤの時代、エルサレムがアッシリア軍に取り囲まれるところまで、主は許しておられて、そこから一気に滅ぼすみわざを行われました。そして、イエス様は、ラザロが病であることを知っていて、さらに二日間待って、完全に死んだようにさせて、それからベタニヤの彼の家に向かったのです。それは、病をいやすのではなく、死からよみがえらせるためです。

ですから、私たちが祈りを献げていて、その祈りがまるで聞かれないように感じるのですが、多々あるのです。そして、自分自身は全く理解できないのに、後でふりかえってみたら、主のみこころが行われ、みわざが現れていたということが多々あるのです。教会がエルサレムから出て、異邦人に福音を伝えるようになったのは、ステパノの殉教があって迫害が苛烈になったので、エルサレムから逃げて行ったのです。そして、ギリシア人にも福音を語る者たちが現れて、ようやく、異邦人も救う福音を彼らが伝え始めたのです。

3B 主のいつくしみ

昔、日本による、朝鮮の教会の迫害を証言する本がありました。その題名は「たといそうでもなくとも」(安利淑著)というものです。その題名は、ダニエルの友人三名が、金の像を拝むことをしなかったのですが、たとえ火の炉の中に入れられても、神は救ってくださる。たとえそうでもなくとも、私たちは像の前にひれ伏さないと云ったところから、来ています。その苛烈な迫害において、苦しみから免れる祈りが、奇跡的な脱出など聞かれなかったとしても、信仰を捨てないという内容です。

死といのちの原則が働いていて、祈りが聞かれると言いましたが、そのいのちの原則が、あまり目に見えるかたちで現れないことが多いです。しかし、その弱さの中にこそ、キリストの恵みが現れて、弱い時に実は強くされていることがあるのです。主は、そのようなかたちで、私たちの祈りを聞いてくださることがあります。パウロに、肉体にとげが与えられたことを思い出してください。サタンの使いによるものでした。「Ⅱコリ 12:8-9 この使いについて、私から去らせてくださるようにと、私は三度、主に願いました。しかし主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである」と言われました。ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。」

アメリカの南北戦争の時に、南軍のある兵士が病院の壁に書いたと言われている詩があります。詩がとても心に残りました。

『大きなことを成し遂げるために』

力を与えて欲しいと神に求めたのに
謙虚を学ぶようと 弱さを授かった。

偉大なことができるように健康を求めたのに
より良きことをするようと 病気をたまわった
幸せになろうと富を求めたのに
賢明であるようと 貧困を授かった
世の人々の賞賛を得ようとして成功を求めたのに
得意にならないようと 失敗を授かった
人生を楽しもうとして あらゆるものを求めたのに
あらゆることを喜べるようと 命を授かった

求められたものはひとつとして与えられなかったが
願いはすべて聞き届けられた
神の意にそわぬものであるにもかかわらず
心の中に言い表せない祈りはすべて叶えられた
私はあらゆる人の中で 最も豊かに祝福されたのだ¹

思いを超えたところで、主はすべての祈りを、みこころそってかなえてくださるのです。

4A へりくだり

ですから、私たちは、祈りが聞かれることを経験するために、恵みを知らないといけません。恵みを知るには、へりくだりを学ばないといけません。6 節でヤコブが言っています、「神は高ぶる者には敵対し、へりくだった者には恵みを与える。」

恵みを受けるには、自分が減んで当然のものであることを知っていることが必要ですね。自分とはとんでもない罪人である。滅ぼされる身である。なにも、主はこんなにも祝福してくださった、という悟りが必要です。

そして、恵みを知るには、自分が値しないのに神が愛しておられ、贈り物をくださることを受け入れないといけません。多くの人が高ぶりのゆえに、いや、結構ですと贈り物を拒みます。自分で何とかできると思っているのです。けれども、素直に受け入れていただくのです。祈っても、祈りが聞かれる時に、その答えをしっかりと受け止めないことがあります。恵みを受けるためには、恵みをもって、広い心で受け入れていく必要があります。

¹ <https://www.fukusei.jp/staffblog/%E3%81%82%E3%82%8B%E7%84%A1%E5%90%8D%E5%85%B5%E5%A3%AB%E3%81%AE%E8%A9%A9/>